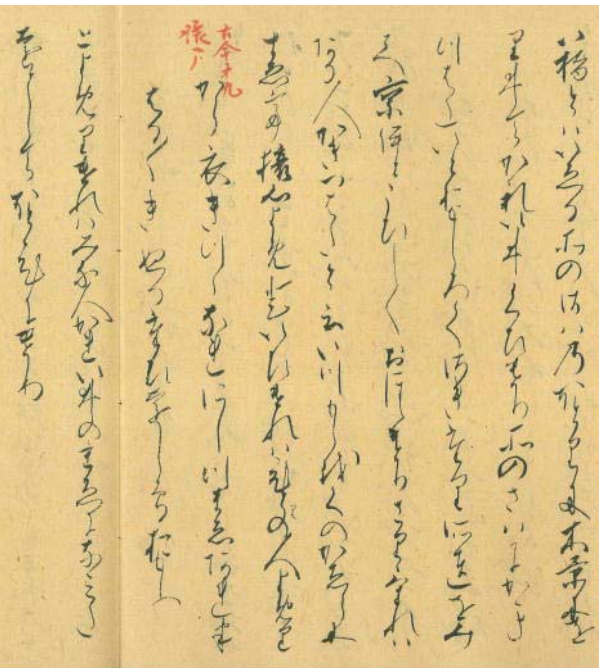


『伊勢物語』第九段「東下り」を読む

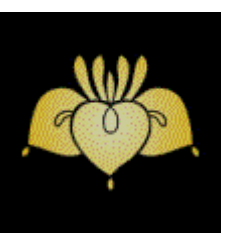
萩原 義雄

第九段の本文



橋を八つ渡せるによりてなむやつはしとはいひける。そのさはのほとりの木のかげにおりゐて、かれないひくひけり。そのさにはかきつばたいとおもしろくさきたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふいづもじをくのかみにすへて、たびのころをよめ、といひければよめる。

から衣きつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思とよめりければ、みなひと、かれないひのうへにのみだおとしてほとびにけり。



※かきつばた【杜若・燕子花】植物。「いづれがアヤメ？カキツバタ？」

<http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/BotanicalGarden/HTMLs/izure.html>

※「いとおもしろくさきたり」の過去の話を語る助動詞「けり」のなかで、「一際明らか」を「こ」にとつて現在進行形で助動詞「たり」の語が用いられており、「いまさに、眼前に広がり咲き誇る紫色の花であるかきつばた」を表現したものとなっている。

「うたの文字遊び」縁語・掛詞 折句

一 「折句」

実例1 「かきつばた」

から衣	きつな	なれにし	つまし	あれば	はる	ばる	きぬる	たび	をしぞ	思ふ
唐衣	着つ	馴れにし	棲し	有れば	張る	張る	着ぬる	たび	をしぞ	思ふ
	来つ		妻し		遙る	遙る	来ぬる	旅		

「から衣」のうたは、勅撰和歌集である『古今和歌集』(延喜五(九〇五)年成立)巻九・羈旅四一〇・在原業平として末尾の「名にし負はば」四一一のうたと共に収載されている。このことが何を意味するかと云えば、業平の東下りが史実に基づく実録であったかのように後世の人には思えてしまうことになっていく。だが、『古今和歌

集』の撰者がこの二首の歌をどう展開して見せたのであろうかという点についてはこれまで考究が及ばなかったのも事実では無かろうか。この『伊勢物語』という歌物語が選んだように、ある男の物語で佳いのではないのか。

平安時代における植物・花「かきつばた」を詠んだ歌は意外に少ないことにも気づく。勅撰和歌集では『後撰和歌集』巻第四に、

藤原のかつみの命婦みやうぶに住み侍りけるをとこ、人の手にうつり侍りに ける又のとし、かきつばたにつけて
かつみにつかはしける

良岑義方朝臣

いひそめし 昔のやどの 杜若 色ばかりこそ かたみなりけれ

〔夏・一六〇〕

とあるにすぎない。鎌倉時代には、『新千載集』一六一二、『續後拾遺集』一四一、『風雅集』二六一、『金葉集』七二の歌がある。

この一首のうたから導き出せることは、「かきつばた」の花の色は藤原家の「藤」の花と同じ紫色であること、已前通いつづけた邸内の「垣つ端」に咲いていたあの藤の花と同じ色の「かきつばた」の花色だけが、あなたのことを偲ぶよるべですというのである。「垣つ端」は「かきつばた」に通じ、男にとつて手の届かぬ人となってしまった「かつみの命婦」、その現実を過去である昔へと蘇らせていくのであろう。また、うたの世界ではないが、清少納言『枕草子』第八十八段・「めでたきもの」に紫色の花として、

すべて紫なるは、なにも／＼めでたくこそあれ、花も、糸も、紙も。紫の花の中には杜若トクサぞ少しくき。色はめでたし。六位の宿直すがたのをかしきにも、紫のゆゑなめり。

とあつて、「かきつばた」という花は、「垣つ端」とは名のみで、紫という高貴な色合い

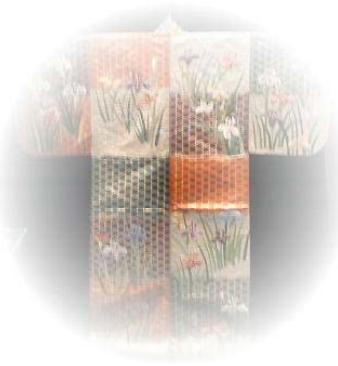
を有している。これと同じように、六位の蔵人の宿直姿が興趣をそそるのは、指貫さしぬきの色が紫であるからにほかならない、小憎らしく思えてくるという感情がここでは表現されている。このことから「かきつばた」は、他の花々の色合いを持つても寄せ付けぬ高貴な紫色そのものだということである。

さて、話しを『伊勢物語』に戻そう。第二段から第六段は、後に参内して二條の后となる女人の物語である。藤原家という高貴な身分の出自である彼女の許に「をとこ」は通い続けた。であるが、やがて崩れかけた土塀あひだまには護衛が張り付き、「行けども逢はで帰りけり」「第五段」という立場に置かれていく。「京にありわびて、東に行きけるに」「第七段」、「京や住み憂かりけむ、東のかたに行きて住み所求むとて」「第八段」、「京にはあらじ、東のかたに住むべき国求めにとて行きけり」「第九段」と伏線が引かれ、果たされぬ戀が故に東下りという道行きを選んだ「をとこ」の物語は、やがて東の端にある隅田川を舟で渡り、第十段では、武藏国に住む藤原家出身のあてなる母から生まれた娘と戀に落ちるのである。この一連の流れを印象深いものとしているのがこの「かきつばた」ではなからうか。野の緑々した色が際だつ旅路のなかで「一際ひととせ眼にとまつた紫の花を見て思い深げにしていゝ」とこの姿を見て、供人が句の上に「かきつばた」の五文字をすえてうたを詠んではと、その「をとこ」の意を読み、興味なことを投げかける。これが「をとこ」の意に響き瞬時のうたとなる。このときの思いは、次に隅田川を渡る舟のなかでも再び「都鳥」という名をもつて想起され、紫のゆかりは、第十段へと及んでいるのではなからうか。

実例2 五文字を句の上に据えたうたの「女郎花(をみなへし)」

朱雀院すじやくみん女郎花をみなへし合あはせの時に、をみなへしと五文字を句の頭かしらに（む）きて詠める

をぐら山 みねたちならし なくしかの へにけむ秋を しる人ぞなき



とあつて、同じく『古今和歌集』卷十・物名四三九・紀貫之（宇多天皇主催の「亭子院女郎花合」の歌がある。 ※貫之は、『玉左日記』の作者でもある。



このうたは、「小椋山の峰に立つて脚で平にならしながら、切なそうに鳴いている鹿が、あのとまどきのようにして行く秋を生き抜いてきたのか、誰も知る人はいないのだ。であるから、この鹿と同じように私はあなたのこと恋しくたまらないのだと叫んでも、あなたはこれまで他（よそ）の女人方にもそうおつしやつてお欺しなきてきたのでしょ」という皮肉がかつた感情表現をとっている。この五文字「をみなへし」の語源を大槻文彦編『大言海』には、「花ノ色、美女ヲモ壓ス意カト云フ、イカガ」〔四一九五四一②〕とあつて、「美女をも壓す」の意で、すなわち、女人を圧迫するドンファンさを見抜いた歌意表現になつてはいまいか。

このように、「五文字」を読み込む「折句」という修辞技法は、『古今集』のなかにはこの二例しかなく、「折句」という名稱を獲得する初期の段階を提示していて、この実在がやがて開花し、暗号コードとして一種の個と個の通信文の役割をも担つていくことになつたのである。いわば、歌という三十一音の韻文であればこそ、即興性を有し、かつ巧みに意思疎通を繰り返しやすかつたのではないかと考えてみた。

※「女郎花」野草之中ニ女郎花 『倭名類聚抄』序・二一〇⑨

○女郎花 新撰万葉集詩云——（女郎花）。和歌云、女倍芝。（国立歴史民俗博物館『倭名類聚抄』卷十、草木部・一八ウ⑧）

実例3 「琴賜へ」↓「琴は無し」

A **こ**との葉も **とき**はなるをと **た**のまなむ **ま**づは見よかし **経**ては散るとや 「小野小町」

B **こ**との葉は **と**こなつかしみ **花**折ると **な**べての人に **知**らすなよめ 「或人の返歌」

二 「沓冠」のうた

実例1 平安時代後期の源俊賴が「花見」を見に行くことを誘つたうた

はかなしな **を**ののをや**ま**だ **つ**くりか**ね** **て**をだにも君**き**ミ **は**てはふれずや 『散木奇歌集』雑下・一五三二二

実例2 新古今和歌集 藤原隆信 「さよふけぬ とくたたむ」

さめざ**め**と **よ**るひるし**げ**く **ふ**る涙**な**みだ **今**日**け**ふのくれは**た** **ぬ**れやまさらむ 『隆信集』四四三

実例3 兼好法師と頓阿の贈答歌 「よねたまへ」**ぜ**にもほし

よもす**ず**し **ね**ざ**め**のかり**ほ** **た**枕も **ま**袖も秋に **へ**だてなき**か**ぜ 『續草菴集』五三八・吉田兼好

実例4 兼好法師と頓阿の贈答歌 「よねはなし」**ぜ**にすこし
よるもうし **ね**たくわが**せ**こ **は**ては**こ**ず **な**ほざりに**だ**に **し**ばしとひ**ま**せ 『續草菴集』五三九・頓阿の返歌

三 「ことば遊び」という言語遊戯

奈良時代の『日本書紀』に云う「倒さかしまこと語」「諷歌そふうた」「童謡わごうた」や『万葉集』に云う「戲訓ぎくん」「譬喻歌ひゆ」にはじまり、平

安時代初期に仏典・漢籍訓読に大いに用いられた「片仮名」及び「乎呼止点」にも、ことばの解析がなされている。謂わば解析に通ずる同じ學流の法則を学ばねば適わぬ知的空間世界が、文字ことばをはじめた時からこの列島日本に移入され根付き確実にあるからである。

《参考資料》

紀田順一郎著『日本の書物』より抜粋―HP『伊勢物語』―

http://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/kokugo_ise8.htm

《補注》

註1 『今昔物語集』卷第二十四にも、「在原業平中將行東方讀和歌語第卅五」(岩波古典大系本、四―三三〇頁参照)とあって、「東下り」の逸話が見えている。ここでは、「かきつばた」を「劇草」と漢字表記している。頭注説明では、「よみは、倭名抄以下による」と記載していて、実際、国立歴史民俗博物館蔵『倭名類聚抄』卷十、草木部・二八才④にて調べてみるに、「劇草 蕪敬曰―一名馬蘭、加岐豆波太カキツバタ「〇上上平」とある。また、この『倭名抄』には「由跋 本草云―薄葛反。加岐豆波那カキツバタ「平上上〇」という例も見えている。

註2 長野県と群馬県の境、標高千八百ヤマトに位置する碓氷峠(中山道関所跡)に、日本武尊やまとたけるのみことの建立したと伝承する熊野皇大神神社がある。この神社前より右へ一〇〇ヤマト以下がった谷の中腹に建碑年不詳の「一つ家の碑」と呼ばれた武蔵坊弁慶の作と言ひ伝えられる数字歌の歌碑、

八万三千八 三六九三三四七 一八二

四五三三二四六 百四億四百

があり、「やまみちは さむくさみしな ひとつやに よごとみにしむ ももよおくしも(山路は 寒く寂しな

一つ家に 夜毎身に凍む 百夜置く霜)」と云う。また、『日本書紀』には、日本武尊が東国から信濃に入るとき、碓日坂に到り、妻である弟橘媛を偲んだという伝説が書かれている。それに由来する「思婦石」、みくにふみの歌碑が碓氷峠の一番奥の茶店の前にある。ここには、

四八四四 七二八億十百 三九二二三

四九十四万万四 二三四万六一十

とある。「よしやよし 何は置くとも 御国文 よくぞ読ままし 文読まむ人」となる。

《コラムのページ》

※「句い」攷

※「用字通観」(尾崎紅葉作品集)